

I 総合教職キャリアセンターの設置構想について

総合教職キャリアセンター設置準備室 室長 新井 肇

1. 総合教職キャリアセンター設置の目的

社会の急激な変化に伴う学校の教育課題の多様化・複雑化・深刻化に対応するうえで、将来リーダーとなり得る教員の養成が急務となっている。求められる力量としては、教育場面における指導力、実践力、課題解決力等の「教師力」とともに、幅広い人間性や社会性を土台に多忙化・疲弊等による精神的・身体的負荷にも対応できる「人間力」があげられる。教員養成系大学にあっては、この「人間力」「教師力」を視野に、学校現場が求め必要とする教員、採用後も意欲的に活躍し、成長し続けることのできる教員を養成するための体制を整える必要がある。

そのため本学においては、文部科学省の特別経費事業「幅広い職業人の養成や教養教育機能の充実」として予算措置されたプロジェクト「総合教職キャリアセンターを基軸にした人間力・教師力を備えた教師の育成—新時代の学校をリーダーとして担う教師を育成するキャリア教育の開発・展開—」(平成22年度～27年度)に基づき、学生の「入口」(入学)から「出口」(卒業、教員としての採用)、さらには「出口以降」(教職のための継続教育)までを見通したキャリア教育と教員養成カリキュラムによる専門教育との協働・連携によって、新しい教師教育体制の在り方を探求し、その構築と具体化を図っている。その基軸になるのが総合教職キャリアセンターであり、センター設置を円滑かつ効果的に推進する組織が総合教職キャリアセンター設置準備室である。

2. 総合教職キャリアセンターの先進性

総合大学においてはキャリアセンターが多く大学の設置されており、教育養成系大学・学部においても教員就職対策を中心としたセンター等の設置は進められている。しかし、専門的職業人としての教員の養成(カリキュラム)、キャリア教育、就職、継続教育といったことを俯瞰し、全学的な取組として組織的な研究と実践を行うキャリアセンターの設置は未だ例がなく、先進的なものと考えられる。

単に教員採用試験に向けた就職指導を行うことを超え、学部や大学院における教員養成のカリキュラムの構造化に対応し、学校現場や現職教員との連携、キャリアカウンセリングの専門家等との連携によって、教員養成をキャリア教育という視点から協働的に補完する取組を行うことは、今日の複雑かつ困難な学校教育を担う教師の養成にとって必要不可欠である。また、教員養成系大学においては、教師をめざす学生はキャリア教育の受け手であると同時に、将来的にはキャリア教育の担い手となるという二重性を帯びていることから、キャリア教育の充実は喫緊の課題である。

3. 学び続ける教師の育成

人間力、教師力を備えた教師となるためには、「学び続ける」姿勢が不可欠である。

とりわけ、今日のような知識基盤社会においては、社会状況や子どもたちの変化を理解するための最新の情報を獲得し絶えず更新していくことが求められる。そのために、教師は学び続ける必要がある。

また、教職の専門性とは、固定的な何かというよりも個人的な要素に左右されるところが大きいものと考えられる。したがって、教師をめざす学生には、正課および正課外で学んだ、あるいは体験した内容について、批判的に自ら見直し、常に考える姿勢を持つことが求められる。自己を理解し、人間性や経験の幅を広げ、自己成長するためにも、学び続ける姿勢が不可欠である。そのことは、自らが学ぶことの楽しさを体験・実感することなしには、教師として子どもたちに学ぶことの楽しさを教えることはできないという点にもつながっていく。

以上の点から、総合教職キャリアセンターのめざす基本コンセプトは「学び続ける教師のためのキャリア形成支援」という点に置かれている。①学部の養成段階、②採用試験に向けての支援、というところにとどまらず、③採用後の教師として成長、あるいは危機の乗り越えにおけるフォローアップやサポート、つまり三段階のキャリア形成支援をめざすところに本センターの特徴がある（図1参照）。

4. 総合教職キャリアセンターの「つなぐ」機能

本学では、18単位に及ぶ実習科目を含む正課によって教師としての専門的な力量の形成を図るとともに、不登校支援や学習支援のボランティア体験、部活動、地域と連携した活動といった正課外の活動によってそれらを補完し、教師としての基本的素養や人間としての幅を広げることで教員養成の充実をめざしてきた。

正課による学びについては、現在策定中の教員養成スタンダードによって質の保証がなされることになる。そこに正課外の活動を加え、学生一人ひとりが人間性や教師としての力を総合化していくための支援を行うことが、総合教職キャリアセンターに課せられた役割である。実際には正課外の活動に対する支援が中心になると考えられるが、正課—実習—正課外活動の三者を有機的につなぎ、個人内での学びの統合を図ることをめざしている（図2参照）。

5. 総合教職キャリアセンターのめざす方向性

総合教職キャリアセンターが、学びと体験の統合を基盤とした教職キャリア形成



図1 学び続ける教師のためのキャリア形成

支援を進めるうえで、めざす方向性は次の三点にまとめられる（図3参照）。

第一の柱は、調査研究（Research & Development）の推進である。単にキャリア形成支援のための場や機会を提供するというだけではなく、その支援がキャリア形成のなかでどのような意味を持っているのか、どのような支援が教師の成長にとって有効なのかということについて実証的に調査・研究し、

キャリア形成に資するプログラムやツールの開発を行うことが求められる。学び続けるための教師を育成するために、総合教職キャリアセンター自体が学び続けるということである。

第二の柱は、学部段階での正課外の学びの支援、および卒業後も見通した三段階のキャリア形成支援の具体化（Support）である。学生一人ひとりが教員養成スタンダードに基づく正課の学びと正課外の多様な体験との統合が図れるように、積極的かつ継続的に働きかける必要がある。

第三の柱としては、学びと体験の統合が促進されるように、学内の様々なセンター間の連携を図り情報共有と協働を進める、正課と正課外の活動との有機的結合を図る、といった「つなぐ」役割（Coordinate）があげられる。例えば、いくつかの部署に分かれているボランティア活動の受け入れ窓口、紹介窓口を一本化し調整を図ることで、学生が主体的・効果的に取り組める活動へとアレンジする。ボランティア体験入門科目を1年次に位置づけ、2年次～4年次に学生がボランティアとして取り組んだ体験（それ自体は単位化せず）の振り返りを4年次で演習科目として展開する、といった取組なども考えられる。

このような活動をつなげていくことによって、学生の主体的な学びを促進し、教師としての力量、資質、態度の形成に向けて、積極的・継続的な支援を組織的に行っていくことが、総合教職キャリアセンターのめざす方向性である。

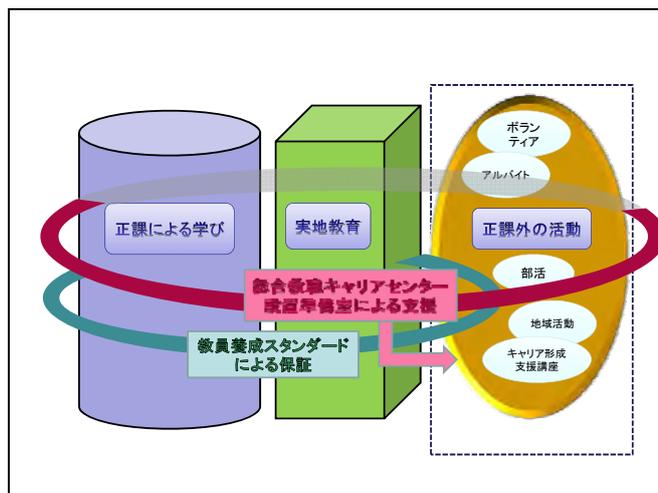


図2 総合教職キャリアセンターのつなぐ機能

図3 総合教職キャリアセンターのめざす方向性

